

## 第 91 回麻布獣医学会 市民公開講座 1

## いくつから始めればいいのか？ アンチエイジング

○栗形 麻樹子

一般財団法人 食品薬品安全センター 秦野研究所 研究開発部研究開発室

日本は長寿大国となりました。テレビでは健康番組が流行り、私たちのアンチエイジングへの意識は高まり、メタボリック症候群というカテゴリーに神経質です。「いくつからはじめればいいのか？ アンチエイジング」のタイトルから、皆さんは何を想像されたでしょうか。日ごろからアンチエイジングを心がけ、肥満は大病の基と気をつけている方は多いと思います。

近年、将来の健康や特定の病気へのかかりやすさは、胎児期や生後早期の環境の影響を強く受けて決定されるという考え方（DOHaD 概念：Developmental origins of Health and Disease）が提唱されてきました。例えば栄養環境です。妊娠期や授乳期に低栄養の環境に暴露されると、高血圧、糖尿病といった成人病の素因（遺伝子変化）が形成され、その後のマイナスの生活習慣の負荷により成人病に罹患するという考えです。日本人女性のやせ嗜好は強いと感じていましたが、2015 年の調査では OECD 加盟国の中で日本は 2500 g 以下の低体重児出産率の割合がワースト 1 位となっていました。

「将来の病気のリスクを決定する時期は胎児期や生後早期の発達過程にあるのでは？」という仮説に基づいて動物実験による検証も行われています。マウスを用いた実験では、妊娠期間中の母動物への給餌制限負荷により子マウスは小さく生まれてきますが、生後は大きなマウスになり寿命も短くなります。また母動物の給餌制限により胎子の長寿遺伝子蛋白の発現や分布が非制限給餌群と異なっていました。これらの結果は胎生期からアンチエイジングが始まっていて、胎生期環境が寿命に影響することが推測される結果です。では、今、私たちにできることは何でしょう。この分野の医療のありかたも「病気になったヒトを治療する」のではなく、発達期から疾病リスクに対して介入していく「先制医療」について議論されています。

私たちにとってのアンチエイジング、次世代を担う子供たちにとってのアンチエイジングをこの市民講座を通して学び、私たちが発信していくべきことを一緒に考える時間にしたいと思います。